

令和2年度 学校教育自己診断 中学校（共通項目）

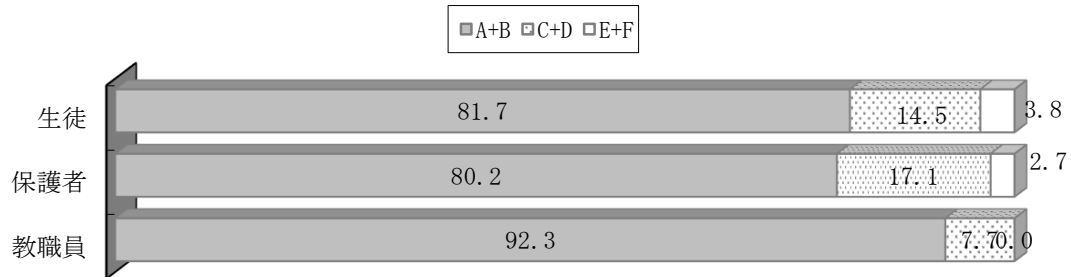
1. 学校の生活について

生徒 学校へ行くことが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くことを楽しみにしている。

教職員 学校では、生徒がいきいきとした学校生活を送れるよう、学校全体で取り組んでいる。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度比:生徒+2.2%、保護者-0.7%、教職員+0.9%

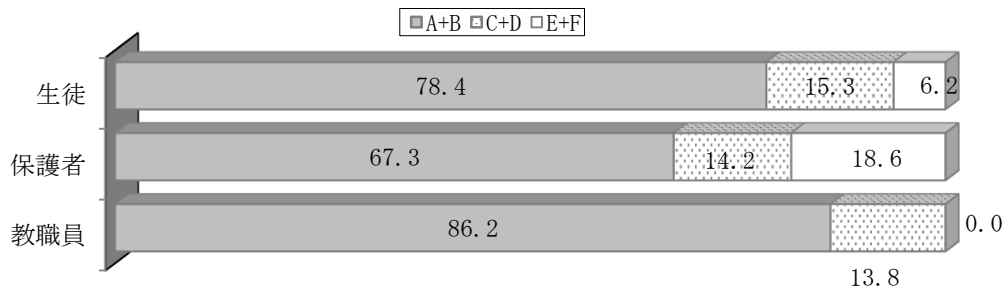
前年度との比較において、全体として高い数字を維持しており、多くの生徒にとって学校が楽しく思える場所となっていると評価できる。しかし、2割程度の生徒にとっては否定的に捉えている事実は看過できない。全ての生徒が安心して学べる学校環境づくりを推進していく。今後も定期的実施している生活アンケート等の結果も複合的に分析し、引き続き生徒の居場所づくりの取組を推進していきたい。

2. 「確かな学力」の育成について

生徒 先生は、学習に興味や関心を持たせる指導をしている。

保護者 学校は、学習に興味や関心を持たせる指導をしている。

教職員 学校では、生徒が意欲的に学ぶことのできる授業づくりのために、全校的な研究が行われている。



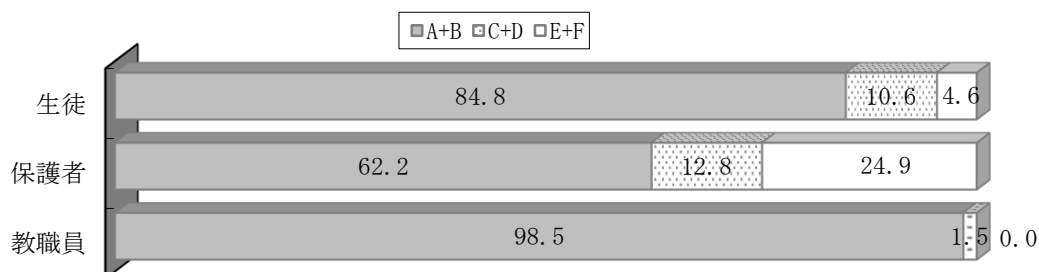
〔分析〕

前年度比:生徒+1.2%、保護者+0.5%、教職員-5.2%

前年度と比較して生徒・保護者の肯定的な回答が増加した。これは、新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」への授業改善に向けた移行期間において、生徒同士の対話を取り入れた様々な試みが定着し出したことが要因として考えられる。教職員は、生徒の関心・意欲を高めるため、試行錯誤しながら授業改善に向けた教材研究に取り組んでいるが、研究課題の共通認識を図ったり、全校的な授業力向上に向けた研修計画を立案したり等、更なる改善を要する。保護者については、否定的な意見の他に、「わからない」とする回答も一定数あり、学校での取組を積極的に発信していくことが求められる。

3. ICTの活用について

生徒 コンピュータやプロジェクターを使った授業は、わかりやすい。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。



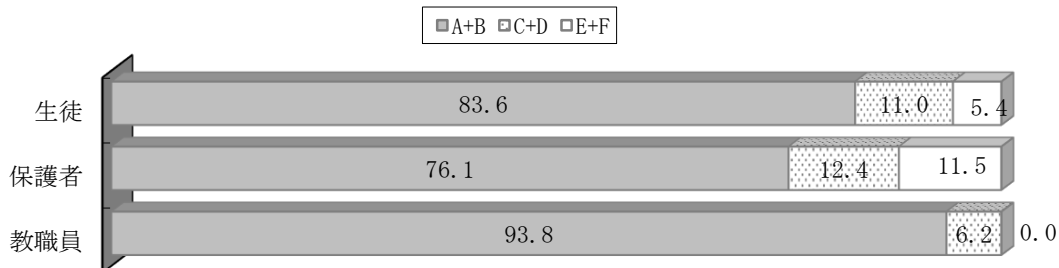
[分析]

前年度比:生徒-0.5%、保護者-0.4%、教職員+2.8%

前年度と比較して三者ともほぼ同程度の回答を得た。生徒・教職員の肯定的な回答に比べ、保護者の肯定的な回答が低く、「わからない」と回答した保護者も一定数いて、学校での取組を積極的に発信していくことが求められる。また、令和3年4月から生徒1人1台のタブレットPC環境が整うため、ICT機器を活用した授業づくりが求められる。

4. 成績・評価について

生徒 学校が出す学習の成績・評価について、納得できる。
 保護者 学校は、子どもの学力や学習状況に対する評価基準を、適切に提示している。
 教職員 学校は、生徒・保護者にわかりやすく、適切な評価基準を提示している。



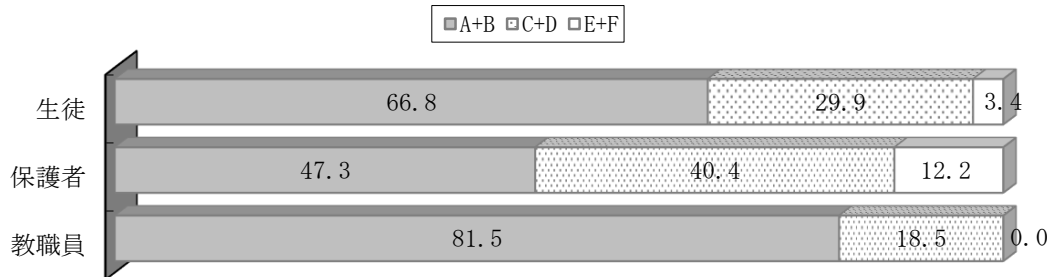
[分析]

前年度比:生徒+4.7%、保護者+5.2%、教職員-0.5%

学習に関する評価や成績は、生徒が自らの学習活動を見つめ直すきっかけとしての機能とともに、保護者の学校に対する信頼や協力を得る手がかりとしての機能も有することから、妥当性や信頼性、透明性を高める取組が不可欠である。また、生徒・保護者の回答において、前年度から肯定的な回答割合が上がっていることより各校の取組の結果だと考えられる。しかし、保護者の回答において、「わからない」の回答も一定数あることから、保護者に対して、学習評価が通知表の評定(5段階)だけで伝わるような、学級・学年懇談や二者・三者懇談の機会を十分に活用しながら、学習評価に関する事項(成果と課題等)を丁寧に説明していくことが求められる。

5. 家庭学習について

生徒 家では、自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、家庭学習の習慣がつくよう取組を行っている。
 教職員 学校では、家庭学習の充実に向けて、家庭と連携するなど、重点的に行っている。



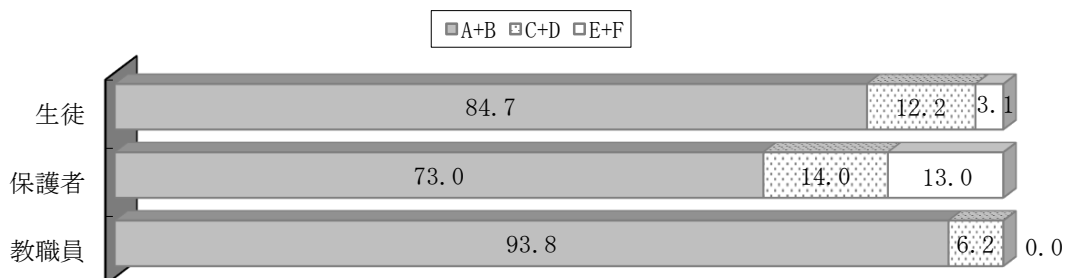
〔分析〕

前年度比:生徒+4.3%、保護者+0.7%、教職員+0.1%

前年度に比べ、三者とも肯定的回答が増加している。しかし、生徒の約3割、保護者の約4割が否定的な回答であり、自学自習力の育成にまだまだ大きな課題があると考え、補充学習や、自学学習など様々な学習の場の設定や、家庭学習の充実に向けた家庭との連携を通して、「自ら学ぶ力」の育成について検討していくことが課題と考える。また、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から実施できなかったが、学校支援地域本部との連携を密にし、放課後学習会・テスト前学習会等への参加促進の強化等も具体的な取組の1つと考えられる。

6. 読書活動の推進について

生徒 学校では、朝読書など、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 保護者 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 教職員 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。



〔分析〕

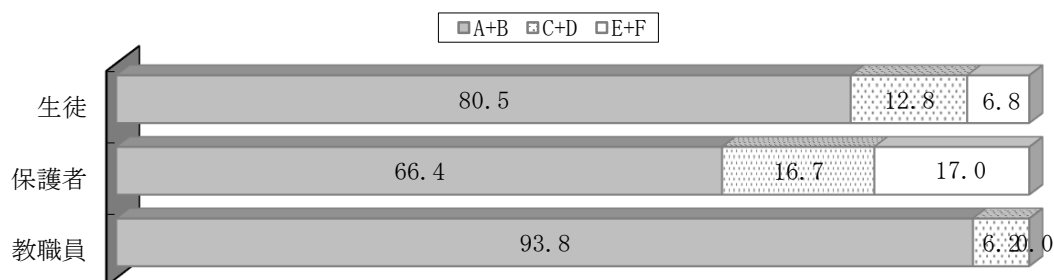
前年度比:生徒+6.7%、保護者+1.0%、教職員-0.5%

三者とも一定の数値が得られている。それは、朝の読書活動が全校的に推進されていることや、各学校の図書館が室内環境や蔵書の整備等が進められてきたことへの評価が、一定数値に表れた。

引き続き、子どもの読書量を増やしていく取組を進めるとともに、家庭で読書することにつながる取組を推進することが求められる。

7. キャリア教育について

生徒 授業や様々な学校での活動の中で、自分の生き方(自分らしさ、他の人や社会とのかかわり、進路など)について、考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、それぞれの生き方(卒業後の進路を含む)について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、生徒が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



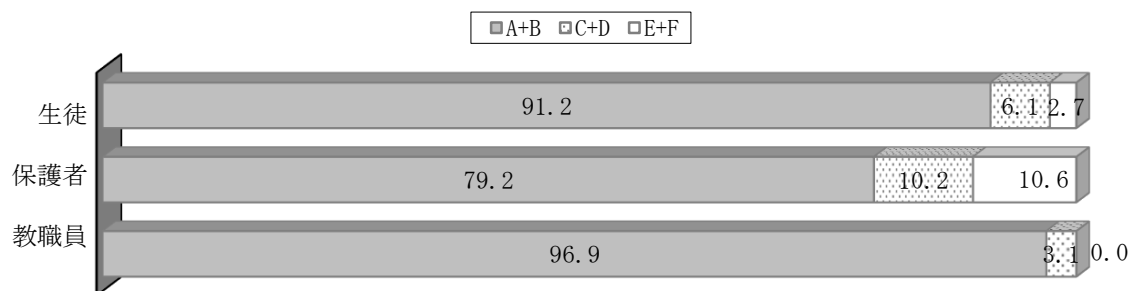
[分析]

前年度比:生徒+4.8%、保護者+9.2%、教職員+8.1%

前年度と比較して、三者とも肯定的な回答が増加した。ただし、保護者の肯定的意見は、生徒・教職員と比較すると高い数値とは言えないこと、「わからない」の回答も一定数あることから、引き続き全ての教科や教育機会の中で、「自分らしい生き方とは何か」や「他者とのかかわり」を意識させ、そのことそのものがキャリア教育であるということを、保護者により一層発信していかなければならないと思われる。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

生徒 学校では、人権の大切さや社会のルールについて、道徳の授業などで学ぶ機会がある。
 保護者 学校では、中学生として守るべきルール・マナーや人権の大切さについて、適切に指導してくれる。
 教職員 学校では、生徒が人権の大切さや社会的なルールを身につけることができるよう、年間計画に基づき、道徳教育を継続的にやっている。



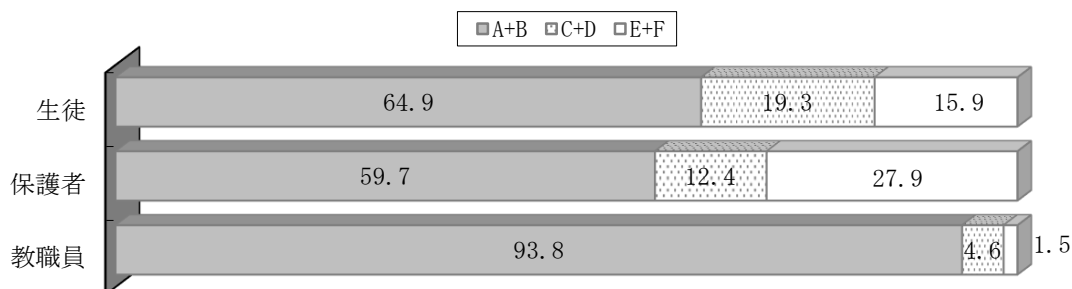
[分析]

前年度比:生徒+1.1%、保護者+3.4%、教職員+6.9%

各学校においては、計画的に道徳教育推進計画を立案し、実践しており、多くの教職員がその取組を実感している。保護者においても、学校の取組は一定の評価を得ていると考えられる。引き続き、豊かな人間性の育成をめざし、特別の教科 道徳を学校における心の教育の要と位置付け、学校全体で推進する組織を構築し、規範意識の醸成を家庭とも連携していくことが求められる。

9. いじめ防止・対応について

生徒 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を進めている。
 保護者 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を推進している。
 教職員 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を、組織的に行っている。



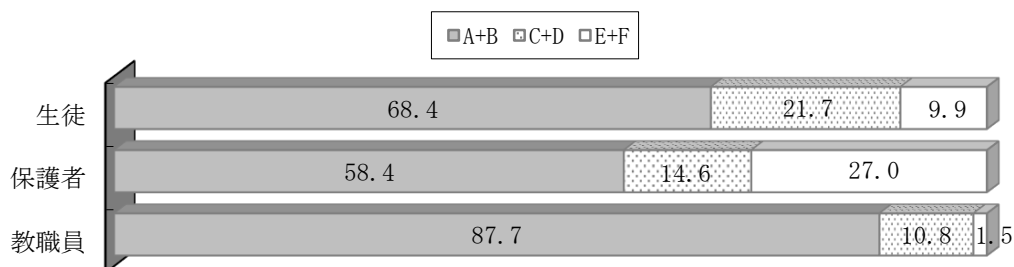
〔分析〕

前年度比:生徒-5.1%、保護者-1.9%、教職員+5.2%

生徒・保護者について肯定的な回答が減少している。生徒の肯定的な回答は、前年度、各中学校において生徒会本部を中心に生徒ともにいじめについて考える取組を行い、70%に到達していたが、本年度数値が減少している。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学校全体でのグループワークや他学年との交流などに制限があったが、感染拡大防止策を講じたうえで、取組内容の検討及び実施が求められる。また、保護者の肯定的な回答も低い。いじめ防止の取組は、いじめを起こさせない日頃からの環境整備が重要であり、生徒会本部による啓発活動だけにとどまらず、全生徒の望ましい成長を促す指導、学校全体がチームとして生徒指導を行う観点を校内研修で取り上げるなど、若手教職員への技術継承や教職員全体での共有が急がれる。また、いじめの早期発見には仕掛けと計画性を持つことが重要であり、生徒指導主事への期待は大きい。

10. 「食の教育」について

生徒 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。(生徒)
 保護者 学校では、「食育」についての取組を推進している。(保護者)
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。(教職員)



〔分析〕

前年度比:生徒-6.7%、保護者+4.8%、教職員+7.7%

中学校での学校給食が始まって一定期間が経ち、「食」に対して考える機会が飛躍的に増えた。しかし、生徒・保護者ともまだまだ肯定的な意見が高い数値ではないことや、保護者の回答には「わからない」の回答も多い。家庭科での成分表の読解や社会科での食糧問題の考察等、教科を横断した「食」への取組もみられる。今後も、生徒の実態に即した指導目標を設定し、食生活や健康に関する行動の変容に資する取組になるよう努めなければならない。

※昨年度まで質問事項としてあった「保護者や地域との連携について」は、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で学校行事などを中止したため、質問項目から削除しております。